

Title	ディルタイとJ・S・ミル : 精神科学の形成をめぐって
Author(s)	小松, 洋一
Citation	哲学論叢. 1986, 17, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66842
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デイルタイとJ・S・ミル

——精神科学の形成をめぐって——

小松 洋 一

今日人文科学ともあるいは人間科学とも言われる学問は、周知のように十九世紀における自然科学の隆盛に伴い、それとは分野を異にする人間の歴史文化一般を扱うものとして提唱されてきた。その際、その分野の研究者いづれにおいても、その学問の学問たる所以、学の客観的普遍性が問われねばならなかったのは当然である。そして、このことは同時に、人文科学の学問的方法論の確立を旨とす運動の起こりを意味する。まさしくリッケルトも言うように「方法無くしていかなる学も存在しない」⁽¹⁾からである。

その場合、この人文科学の方法をめぐる論議の中心となったものは、対極の自然科学の学的方法に対する態度であった。十九世紀の初めには「思弁的自然哲学に対抗する姿勢は、自然科学者の側ではまだほとんどはっきりしたものでなかった」⁽²⁾という状況であったが、世紀半ばになるとすでに「自然科学的方法が普遍妥当的知識の領域を建設」⁽³⁾ (VIII, 191) し、「自然科学的精神が哲学となっていた」⁽⁴⁾ (VI, 3) のである。この学的構成の点で圧倒的優位に立つ自然科学的方法、とりわけ因果法則による方法の適用を、人文科学においても促進し徹底化するか、それともそれとは異なる独自の方法を他にさがし求めるか、この二つの流れが当時のヨーロッパ学界において複雑にから

こうした視点に立つ時、我々はミルとディルタイが成した学問的営みに注目せざるを得ないであろう。十九世紀以降の人文科学の分野において、この両者の残した足跡は決定的なものであり、しかも対照的であった。ありてい
に言えば、ミルは自然科学的方法の応用の延長線上に人文科学を考へていたのに対し、ディルタイはそれを否定す
る立場に立つ。一八四三年にミルが『論理学の体系』(以下『論理学』と略)の中で唱へた「道德科学 (moral
sciences)」が、今日の人文科学の祖型とするならば、それを批判的に継承したディルタイの「精神科学 (Geistes-
wissenschaften)」に関する一連の諸論稿もまた、今日の「説明—理解」論争にまでつながる大きな影響を持ち、両
者の関係は決して看過することの出来ないものである。例えば G・ミッシュは、ディルタイの『精神科学序説』
(一八八三年、以下『序説』と略)と、このミルの『論理学』の両著を取り上げて、次のように言う。「ディルタ
イの『序説』は……広範囲にわたる哲学的運動を呼び起こした。より適切に言えば、それは最初にその運動を起し
たのではない。つまり、その運動は外国、英仏の学である実証主義から伝えられたのである。とりわけ、J・S・
ミルの、その最も有名な第六巻では道德科学の論理を扱っている論理学によって。ディルタイはこのミルの道德科
学を、精神科学の故郷であるドイツに連れ戻し、カントやヘルダー、ゲーテやランケ以来の伝統と結びつけたので
ある」と。ミルの『論理学』は本国においても発表当初から多くの版を重ねたものであるが、J・シールによる独
訳(それは早くも原著より六年後の一八四九年に出る)もまた当時のドイツにおいて広く読まれたのであった。よ
く知られているように、ディルタイの唱へる精神科学の名称も、元々はこの独訳『論理学』に由来し、また若きデ
ィルタイはこの本から「ある種の学問論の構想」を得たのであった。ヨーマッハも言うように、後年の批判的言辭

にも拘らず、ディルタイはミルが掲げた学的理想に「生涯魅せられ続けた」⁽⁹⁾のである。

この小論はしたがって、まず、ミルの道徳科学の内容を分析し、特にその中で心理学が学的基礎になっていることに注視する。その上で、ミル流の心理学を批判しながらも、他方でミルと同じく心理学を方法論上の拠り所となしたディルタイの立場の一頂点を、一八九四年の『記述的分析的心理学考案』（以下『考案』と略）を中心に示して見ていくことにする。

一

ミルの『論理学』は、徹底した経験論に立脚するものであり、思弁哲学とは鋭く対立するものであった。「人間の認識及び認識能力については、まだ当分はドイツ的あるいは先験的な考え方が、この国においても大陸においても、そのような探求に従事する人たちの間で支配的であるだろう。けれども私の『論理学』は、あらゆる認識は経験から発するという、ドイツ派とは正反対の考え方の教科書を提供する」⁽¹⁰⁾。「経験」をめぐるドイツ観念論とミルとの捉え方の違いそのものには、ここでは立ち入らない。要は、ミルが認識論上の先天的原理なるものを認めようとしなかったことである。代わって自然科学的観察が、方法論上大きなウェイトを占めることになる。すなわち「証明の原理と方法の理論とは、アプリアリに構成されるものではない。我々の理性能力の法則は、他の全ての自然力の法則と同じく、その力が働いているところを観察してはじめて知られる」⁽¹¹⁾（L, 413）と。特殊な個々の事実の観察を基に、その事象の原因をさぐり、その上で今度は逆に、それら原因の組み合わせから結果を推理し、事実において検証する、こうした経験論的なアプローチがミルの主眼であり、したがって彼の論理学は帰納法と演繹法とを

相互補完的に結合することであった。

さてその場合、ミルをしてこうした論理学の体系に向かわせたそもその動機はどこにあったのか。それは、諸々の自然科学の方法そのものを整理、論理化し、それを「人間精神が従うことの出来る研究主題の中で、最も複雑で最も困難なものである人間自身に関する科学」(L. 413—414) に応用しようとする、まさにそのことにあった。つまりミルは、精神的社会的現象が、自然現象に見られるような「一般的確実性と斉一性 (uniformity)」(L. viii) を持ち得ることを主張し、そこから、人間の行為を、科学の対象として取り扱おうとする場合の、確固たる法則性を導き出そうとしたのである。

しかし、この問題を考察していこうとした場合、第一に障害として予想されるのは、当然のことながら、人間の意志の自由をめぐる必然論とそれを否定する論との、哲学史上古くから存在する論争である。つまり、因果法則が人間の行為にも適用され得るかどうかということ、その意味で人間の行為は必然的なものか否かという論争である。ミルはこれに答えて、必然論の主張を次のような意味でのみ真理として、これを受け入れた。すなわち「個人の精神に現われる動機が、また同じようにして個人の性格、氣質が与えられるならば、その人が行動するその仕方 は確実に推定されるし、もし我々がその人を十分に知っていて、その人に働きかける誘因を全て知ったならば、物理的事象を予測できるのと同じ確実さを持ってその行為を予言できるだろう」(L. 418)。ミルにとって因果関係とは「一定不変の確実な無条件の前後関係 (sequence)」以外の意味は何も含んでおらず、前件と後件との間の「単なる継起の恒常性 (mere constancy of succession)」を知らせるものでしかない。この関係を人間の意志活動に適用しようとした場合反発が生じるのは、その理論に含まれる「必然」なる用語に対して「因果関係の単なる事

「実」以上のもの、すなわち「不可抗力なもの」「強力なため阻止することが不可能と考えられるような原因の作用」を考えてしまうと結果であるとミルは言う(L. 420)。つまり、必然論を宿命論と同一視するからに他ならない。そうではなくて、「行為の必然」が意味するものは、もしその行為を阻止するものが働かなければ、その行為は確実に生じるということ、「予言され得る可能性」の存在のみを言っているのである。

したがって、人間の性格形成においても、その形成が外的諸環境の必然的結果であると言う場合、それは人間の性格が環境による宿命的産物であることを意味しているのではない。人間はある程度まで自分の性格を変える力を持っているのであって、しかも「性格が究極的には(外的なものによって—筆者)彼のために(for him)形成される」ということは、その一部が、中間的要素の一つである彼によって、(by him)形成されることと何ら矛盾するものではない(L. 422)。ミルはそれゆえ必然論者が宿命論的傾向に陥る場合は、むしろ精神の力(the power of the mind)を強調する自由意志論によってこれを修正しようとする。このことは歴史における一般法則と、個々の歴史上の偉人の関係にも当てはまる。歴史的事実が諸原因の結果であるということ、つまり必然的な歴史法則が存在すること、歴史の進歩において個々の天才達が果した個別的影響力を評価することとは何ら矛盾するものではない(L. 529—539)。ミルにとって「人間の印象や行為」は「単に彼らの現在の環境の結果であるだけでなく、それらの環境と個々人の性格とが結合した結果」(L. 429)であり、この意味でのみ科学的法則の対象となるのである。

第二に注意すべきは、人間の行為一般を考察する上で、ミルが「科学」と「技術(art)¹²⁾」を区別したことである。行為が自然の物理的事実と異なるのは、前者が後者には無い行為そのものの目的すなわち何をなすべきかとい

う行為の内的原理が、絶えず問題とされていることである。ミルは、こうした当為の問題は技術に属するものと
し、科学が直接取り扱う問題ではないとした。すなわち「事実の問題についての主張としてでなく規則や格律とし
て述べられるものは全て技術」なのである (L. 54)。したがって倫理学はミルによれば技術の領域に属し、科学
ではない。科学者の役割はひたすら「ある結果はこの原因から生じ、またある目的に達するにはこの手段が最も有
効だと示すこと」のみにある。「目的そのものが追求されるべきものかどうか、追求されるべきならば、いかなる
場合にまたどの程度にすべきかを決定することは、科学研究者としての仕事のうちには無く、しかも科学だけから
では彼にこの決定は出来ない」(L. 55)。こうした言い方には、ミルが科学をどのように構想していたかを如実に
示している。つまり科学は、あるところのものに携わり、あるべきものへの関与には厳しい制限を設けるのであ
る。ミルのこの姿勢は、ディルタイのそれとは大きく隔たることになる。ディルタイはその初期の道徳的意識を分
析した論文において「生に働きかける倫理学」研究の基礎として「あるところのもの探究」をあげ、「存在にお
いて当為を表示する可能性」を重視した (VI, 2)。さらに『考察』直後の個性性を論じた論稿でもこう述べる。

「あるところのものは、あるべきものと分かち得ないことがわかる。…一方があるところのものを含み、他方があ
るべきものを語るというようにして二つのクラスに命題を分離してしまえば、理念や規範から、それらの連関と根
拠は失われることになる。…事実と規範は不可分に結びついているがゆえに、両者の結合は全ての精神科学を貫
いているのである」(V, 267)。ミルとディルタイ両者の人文科学への取り組み方そのものに、対照的なものがあるこ
とが、ここで見てとれる。単純化して言ってしまうと、ミルは自然科学を見本にした客観的分析を重視し、ディル
タイは人間行為の包括的把握に、より重点を置いたと言えよう。

それでは、道徳科学を構成してゐる中での「人間性の科学 (a science of human nature)」は、いかなる性格、構成を持つ科学として存在するのか。

まずそれが現時点では精密科学 (exact science) たり得ないことは、容易に想像される。精密科学とは、個々の現象が次のような法則の下にもたらされてはじめてそうなるものである。つまり「その現象に影響する全ての原因を含み、かつこれらの原因の一つ一つにそれに実際属する結果を割り当てることの出来る法則」(L, 428) が見出されねばならないのである。例えば、惑星運行の変動をも予測出来る天文学のようなそれである。思考、感情、行為といった人間性の現象に関して、このような法則は到底見出せない。人間の性格を決定する要因そのものが多数かつ多様であつて、「精確で一般的に真であるような主張」は成し得ないのである。

しかし、自然科学においても、潮汐学のような、精密科学のレベルには達してないが、科学と認められる種類のものが存在する。その学の対象である現象の変化を、その個々の細部にわたるまで予見し推測することは出来ないが、その変化が「ある原因に依存し、誤り無き斉一性を持った法則によってその原因から出て来る」(L, 428) ことが確かめられるような、そういう科学が現に存在するのである。ミルによれば、人間性の科学はこうした科学に属するものであり、そこにあつては近似的概括 (approximate generalizations) から次のような手続きを経て一般命題を立てることが可能である。「大きな原因の正確な法則と、十分知られた小さな原因のそれとを、専門的な観察によって得られる様々の変化に関する経験的法則や近似的概括と結合することによって、我々は大体において

真理であるような一般的命題を定立することが出来る」(L. 486)。近似的概括はそれ自身としては「最も低い経験的法則」でしかないが、それはその基礎たる人間性の一般法則と演繹的に結合されることにより、科学的根拠を得た法則となり得るのである。

人間性の一般法則のうち最も基本的なものを、ミルは心理学のそれに置く。心理学は「基本的な精神の法則に関する科学」である(L. 454)。しかし、この心理学によって解明される個々の心的現象から一足飛びに集団的社会的現象を説明することは当然出来ない。社会と個人とのマクロ的關係の中間に、ミルは環境と個人とのミクロ的關係を説明するもの、すなわち彼の言う「性格学(Ethology)」を入れる。性格学は、ある類型的な環境の下で、精神の一般法則によればいかなる性格が形成されるかを考察するミルの創案になる人間性の科学である。したがって道徳科学全体は、心理学と性格学を基礎にしてその上に社会科学が置かれる構造を持つ。

さて、ミルに特徴的なことは、この三つの学的基本的方法が、それぞれ別個に自然科学の諸部門の方法に比せられたことである。それを图示すれば次のようにまとめられよう。

(道徳諸科学)		(モデルとした自然科学)		(学的方法)	
心理学	化学			帰納的方法	
性格学	力学(ニュートン)			演繹的方法	
社会科学	物理学(天文学)				

つまり、大きく分けて、心理学の基本的現象には観察と実験による帰納法が、性格学と社会科学の複合的現象には演繹法が割り当てられるのである。この帰納法と演繹法とは、さしあたり次のような説明から区別される。すな

わち、諸原因から合成された結果が、それらの原因が個々に働く時に生じる結果の総計に等しいかどうかによって、方法的に区別されるのである。等しくない時は帰納法を、等しい時には演繹法をそれぞれ適用することが出来る。例えば、酸素、水素と硫黄から成る硫酸(H_2SO_4)は、その三つの要素のそれぞれの特性とは異なる特性を持ち、それらの特性を単純に合わせても硫酸そのものの特性を導き出すことは出来ない。したがって、こうした化学的現象には観察や実験を通して、帰納法による説明が必要なのである。これに対して、「力の合成」の操作は、二つの力から出る個々の結果を足すことで、合成された結果を引き出せる。こうした物理学的現象には、したがって演繹法があてはまる。このようなそれぞれの自然科学の取り扱い領域に基づき、いわばそれらの方法をひな型にして、ミルは心理学、性格学、社会科学を整理する。

(一)心理学　ミルは心理学を二つのものから区別する。一つは「精神とは何か」といった精神そのものの本性に関する思弁であり、もう一つは生理学である。前者については、その立場からは当然の帰結と言えよう。ミルが直接対象とするのは、精神の現われ、現象面にとどまるからである。後者については、その区別の仕方は前者と比べてはるかに慎重な扱いを要する。究極的には精神状態が生理的状態に依存することは否定出来ない。事実、感覚の法則に限ってみれば、これは完全に生理学に属す。しかしそこから心理学を生理学の一分科であると帰結することは正しくない。なぜなら、ミルによれば、ある精神状態は他の精神状態から生じるといふ、精神状態間だけの統一的秩序つまり「継起の斉一性」(L. 43)が、明らかに存在するからである。

したがって、心理学の主題は、精神状態間の継起を実験的に観察することにより、帰納法を用いて法則を導き出すことにある。そうして得た法則の例をミルは二つあげる。(1)いかなる原因からにせよ、一度ある意識状態が起こ

されたならば（印象）、この原因が存在しなくても、強度は劣るが同一の意識状態（観念）が再現される。（ヒュームを踏襲）(2)これら観念は、連合法則に従って、何かの印象または他の観念によって呼び起こされる。この心理学の一般法則から、ミルは「心的化学」を構想した。すなわち「印象が頻繁に連合して経験された結果その印象の一つが容易に直ぐ全体の諸観念を呼び起こす時には、これらの観念は互いに融合して一緒になり多くの観念でなく一つの観念として現われる」（L. 437）というような、化学変化をモデルにした心的過程の説明である。そして、ある精神現象、例えば信念や道徳感情といったものが、いかなる観念、精神的要素の連合によって結果したかを調べる際、かの自分の唱える帰納法の準則とりわけ一致法と差異法の併用によって、能う限り厳密にその因果構成に迫ろうとしたのである。その意味で、様々に発生する精神現象には実験観察的方法がさらに必要だとするのである。

(二)性格学 心理学が精神一般の基本的法則を確立するものであるなら、その法則は、当然日常経験の真理（老人と比較して青年は向こうみずな傾向があるといった例）をも、その法則からの帰結として導き出せるものでなければならぬはずである。しかし、ここにおいて心理学の法則は、複雑多様な無数の人間的現象を説明するには、あまりに一般的で、十分な包括性を持っていないことがわかる。とは言え、個々の人間の経験による推理は特殊的で、近似的概括以上のものではなく、それだけでは科学的真理性を保証出来ない。とすれば、この両者すなわち精神の一般法則と、「単純な観察によってもたらされる経験的法則」（L. 456）とを媒介するような、確実な知||中間公理（axiomata media）がなくてはならない。ミルが性格学に与えた地位はまさしくこれであった。その法則は、まず一連のある環境を仮定し、その中で精神一般の法則がどのように作用するかを考察することで、この法則から

演繹的に得られるものである。したがってその命題ははじめは仮說的であるとしても、他方の、日常の経験から集められた観察に基づく最低位の概括と照合し、検証されることで真の普遍性を得ることが出来るのである。こうした演繹の手続きをミルは特にベーコンの帰納の手続きと比較して重視した。すなわちベーコン流の一步一步概括を進めていく仕方では、経験的法則のレベル以上に出ることは不可能と考えたからである。このことの有力な引証として、ミルは、それ以前実験的科学であった天文学を演繹的科学に一変させたニュートンの力学の方法をあげる。性格学を、「人間性に関する精密科学」(L. 456) たらんとしたミルは、その方法的論拠を、この天文学における中間原理、ニュートンの引力理論に比したのである。¹³⁾

(三)社会科学 個々の人間の精神現象やあるいは類型的な人間の性格ではなく、「人類の集合体の諸活動及び社会生活を形成する諸現象」(L. 461) を扱うのが社会科学である。¹⁴⁾ とすれば、少なくとも外見上その研究対象は、前者よりはるかに複雑なものとなることが予想される。しかしミルは「現象がどんなに複雑でも、その現象の継起と共在の全ては、個々の要素の法則から結果する」(L. 486) ことをテーゼとし、「人間の思考、感情、行為の現象が一定の法則に従うのならば、社会の現象は、この法則の帰結であるところのやはり一定の法則に従わざるを得ない」(L. 463) と主張する。社会は個人と全く次元を異にする別の実体のようなものではなく、あくまで諸個人の構成体として考えねばならない。したがって、社会科学は社会現象をそれだけで独自のものとして扱うべきではない。「人間社会の状態の継起は、それ自らの独立した法則を持つことは出来ない」(L. 510)。社会変化の説明は、心理学を基本としながら、その上に性格学の援用を必要とするのであり、逆に、誤った意見を引き出さないようにするためにこの両法則によって検証されねばならないのである。

さらに、現象の複雑さは、法則そのものの多さではなく、法則に与えられるデータの種類と数の多さに起因している。その点で確かに自然科学のように諸々の原因から正確な予想を引き出すことは出来ないが、しかし何らかの傾向性を抽出することは出来る。ここにおいてミルは物理学に範を取った演繹法を採用するのである。というのも個人現象を基礎にした社会現象の法則は究極的には「社会状態において相互に結合された人間と人間との能動と受動」(L.46) 以外の何物でもなく、こうした社会現象にあっては、ちょうど作用反作用の「力の合成」のようにして、諸々の原因から結果を合成しなくてはならないからである。むしろ、こうして得た基本的原理に基づく推理は、性格学の場合のように、経験的事象の観察の結果によって検証される必要がある。ただし、このやり方が適用出来ないほどの複雑な歴史的社会的現象にあっては、経験的法則をまず把握し、後にそれを人間性の一般法則から演繹することで推理結合する「逆演繹法」が採用されねばならない(L.52)。したがって、この点からミルは「社会現象の集合的系列」である歴史の道程の中にも一般的法則の存在を見出すのである。

以上がミルの道徳科学の論理の概括であるが、ここまでで明らかのように、その学問的方法の基礎は個人心理学と言えるものであり、それを足場として自然科学的論理による法則性がこの学の全体を貫いているのである。

三

ガダマーはその『真理と方法』の中で、ディルタイにおけるドイツ観念論と経験論との葛藤の先鋭化を指摘したあと、次のように言っている。「初期ディルタイへの英国経験論の非常な影響を、彼の真の意図をゆがめたもの⁽¹⁵⁾としてこれをしめ出したとしても、依然としてその真の意図を統一的につかむのは容易いことではない」。先述の

ように、若きディルタイはミルの『論理学』から精神科学の着想を得たが、その後それがいかなる程度において影響と言えるのかを測定することは難しい。ディルタイの中では経験論への共鳴と批判が共存しており、それゆえミルに対するディルタイの態度も決して確然としたものではない。常に肯定と否定とが相半ばしている。ディルタイの精神科学の形成を見ていく際には、このことを踏まえておかねばならない。

さて、ディルタイが「人間と歴史の研究」すなわち精神科学に自覚的に着手するのは、教授資格論文提出（一八六四年）前後のごく早い時期である。¹⁶ その背景には「実証主義に親しみを感じ」ながら、「知を経験出来るものに限定する」という点でカントとミルやコントが一致することに強く共鳴した若きディルタイの姿があった（V, 45）。「思考は何らかの現実の領域に関する研究に基礎を置いてのみ実り豊かなものになる」¹⁷（JD. 36）と考えるディルタイは、「経験科学に対する優位を夢見ている哲学のうぬぼれ」を理解し難いこととしたのである（JD. 81）。プレスラウ期（一八七一—一八二年）のある認識論の断片においても「経験論の立場を貫くことで客観主義へ到達すること」が「学問論の内的課題」だとして、それに努力した英国代表者がミルだと言っている（XVIII, 186）。「哲学も現象の合法的連関に向かう経験科学の領域に入ってくる」（V, 12）ことは自明なのであり、時代の課題つまり「精神現象に関する経験科学を基礎づける問題」は、まずこのことを認めることから出発しなければならぬ。

この精神科学を基礎づけるための補助手段を、ディルタイはその初期から論理学と心理学に置いた。とりわけ心理学は基礎科学とされ、「我々の歴史的に哲学的世界観に基づく一つの新しい理性批判」を志した時にも、その批判は「心理学的法則と動機」から出発するとされた（JD. 80）。主著の一つの『序説』では、心理学は「精神科学

の最初のかつ最も根本的な字」(I, 33)として決定づけられ、同時代の新カント派が認識論から心理学を分離したことと際立った違いを見せる⁽¹⁸⁾。シュネーデルバッハによれば、精神科学の基礎に心理学を置くことは、特にドイツにおいてはミルの『論理学』による影響の結果であると言う⁽¹⁹⁾。とすれば、ディルタイはこの点においてミルの思想圏に確実に入っていることになる。事実、ディルタイはミルを始めとする経験論内の心理学に、次のような評価を与えているのである。「この経験論の強みは、それを以て何かが始められるということにある。認識批判において経験論は研究者に自己の客体の実在性を請け合ってくれるが、この確実性が無ければ、自然科学も精神科学もその活動を失ってしまう。経験論は、心理学の明晰な建設、心理学における実験の適用を可能にするのである」(V, 77)。

しかし、それにも拘らずディルタイは自身の精神科学を發展させていく過程で、この「学問論の一番最後の編集者」とも呼んだミルを批判していくことになる。それは同時にミル心理学の批判をも意味した。その批判の根拠はどこにあったのか。プレスラウ期の草稿から、あるテーゼを引いてみよう。「精神科学の将来は、その真理を自然認識の真理から演繹することにあるのではなく、自然科学の領域で展開された方法を精神科学に適用することにあるでもない」(XVIII, 63, 78)。ここにディルタイの学的方向の中心がどこにあるのかが、明確に宣言されている。しかも精神科学の論理的問題は、ドイツにあつては「まだ着手されていない」のが現状である。こうした状況の下、ディルタイのミル批判は、先行のミルの道徳科学をいわば批判モデルにして自己の精神科学を作り上げようとする中から、必然的に出て来たものであった。「ミルは精神科学の説明根拠の自立性を完全に認めはしたが、しかし、彼は精神科学の方法をあまりにも自然科学の研究から展開してきた図式の下に置き過ぎている」(V, 50)。ディル

タイのこのミル批判の言葉は『序説』にも見え、自然科学的方法を普遍化しそれを精神科学に適用するミルの姿勢は、図式主義として批判された。このことは心理学にも当てはまる。「心的現象の研究と自然的現象の研究は、確かに区別されるものなのであるが、その点においてミルは十分考慮しなかった」(XVIII, 70)。それでは、ディルタイが目ざした精神科学ひいてはその基礎である心理学は何を抛り所にして自然科学と決別したのか、ということが問題になる。それが全体的連関としての生でありまた「心的生(Seelenleben)」に他ならないのであるが、重要なのは、ディルタイの心理学が、単なる意識現象の分析記述を突き抜けてその底に、創造的個性による歴史的世界の領域をも視野に収めようとする意図を持っていたことである。すなわち「これまでの心理学は精神的出来事の形式と法則を發展させ」てきたが、「我々の存在の意義を第一に決定する心的出来事の内容はこうした心理学からはしめ出されてしまっている」、したがって、この心的内容をこそ我々の探求の対象とせねばならず、それはある意味でヘーゲルの『精神現象学』の過程を辿ることになるとディルタイは言う。「なぜなら、この心的出来事の内容は歴史的运动において諸々の個人の間を通りぬけていくからである」(XVIII, 5)。ディルタイがミルから離れるのもこの点にある。「ミルの大いなる改革は、自然科学で形成された方法を、それが歴史の分野に属するものかどうかを検討せずに、この分野に持ちこんだものに他ならない」(XVIII, 2)といった文言があり、さらに自分が持っていた『論理学』の本には、「ミルは歴史の教養不足から独断的になっている」というメモがあることも、G・ミッシュによって報告されている⁽²⁰⁾(V, LXXXIV)。これらの言ひ方は、こと歴史に関してディルタイが早くからミルとは異なる方法意識を持っていたことをうかがわせる⁽²¹⁾。

四

歴史と心理学は、ディルタイの生の立場において必然的な関係を持つ。一八九四年の『考案』で、それはとりわけ明瞭に提唱された。つまり、まず一方で、歴史的社会的連関の解明は心理学的連関の分析を欠いては成り立たないことが強調される。様々の文化体系や社会の外的組織は「人間の生ける連関から生まれたものであり、それゆえ終局的にはこの連関からのみ理解され得る。心的事実はそれらの最も重要な構成要素を成している」(V, 147-148)。逆の言い方をすれば、求められるべき心理学とは、法律、芸術、宗教などの歴史的生産物を生み出す人間の心的過程を洞察し得るものでなくてはならない。「要求される心理学は、心的生の力強い現実全体を、記述と可能な限りの分析にもたらさねばならない」(V, 156)。そして最終的にディルタイが目ざした心理学も、歴史的世帯を解明する根本学としてのそれであった。「もし心的生の全体を包括する客観的で信頼されるある心理学をもたらしことに成功するならば、その心理学は：諸々の経験科学と共に、歴史の深い因果的連関を追求する哲学的歴史的記述家の努力に対して、その基礎を与えるものであろう」(V, 191-192)。

心的生の全体すなわち生ける精神の全活動を、ディルタイは第一に表象、感情、意志から成る構造連関として捉える。またそれは「生の充実や衝動の満足、幸福を獲得しようとする傾向を持っている」ものとして目的連関であり (V, 207)、同時にその目的論的特性によって、発展する連関である。こうした心的生はしかも「純粹に知的なプロセスによって説明」されるべき対象ではなく、「あらゆる心情の力を共に働かせることによって理解」しなければならぬものである (V, 172)。既存の心理学と、ディルタイが起こそうとしている心理学との違い

が、ここで決定的に現われる。支配的な心理学は「一義的に規定された限られた数の要素」を組み合わせて、心的現象を因果的に説明しようとするものである(V, 156)。ゆえにこの心理学にあっては表象(観念)的要素がとりわけ前面に出てくる。ディルタイは、ミルの心理学はまさにこの学的系統に連なる説明的心理学であるとした。前述のように、ミルは連合法則に従い、様々の要素が化学反応のように融合し合って一つの観念を作り出す心的化学を構想した。しかし、ディルタイによれば、そうした諸要素の構成とその結果には「低い説得力」しかなく、かえって基本的法則からの「演繹の不足」を覆い隠す不徹底なもの、「現実の自然法則の精確さとは対照的なもの」(V, 160—161)なのである。ディルタイのこのミル批判は、例えばカッシーラーの言う、心理学における因果概念に対する構造概念の登場、要素心理学から形態心理学への流れの中で見るべきものであろう。実際、こうしたミルの心理学を、ディルタイは構成的心理学だとしてこれに対し自己の対象とする心的生の内部構造を次のように言う。「心的生は諸々の部分が合体して出来るものではなく、要素からも形成されない。それは複合物といったものではなくて、…根源的に常に決定的な一つの統一体である」(V, 211)。「根源的」とはすなわち直接的所与性を意味する。つまり、この統一体としての心的生の連関は、あるがままの实在性として常に我々の内で体験されているもの、「内的経験に体験として与えられているもの」(V, 170) 以外の何物でもない。それゆえにこそ、ここには「帰納による補充的推理」(V, 140) である仮説が入りこむ余地は無いのである。

一見すると、この説明的心理学としてミルを批判した帰結は、先に述べたミルを始めとする経験論の心理学評価、つまり経験論の強みは「それを以て何かが始められる」という实在性にあり、その上に心理学の明晰な建設が成立するということと相入れない、矛盾したものに思われるかもしれない。しかし、この点でC・アントーニの次

の提言は、ディルタイの真意がどこにあったかを鋭く衝いていると言える。「ディルタイの獨創性は、実証主義者達の基準を逆に彼らの方に問い返した点にある。つまり、彼は実証主義者よりもっと実証主義的に、經驗的事実をこの事実そのものからは生じない法則や方法に従属させることを拒否したのである。その際彼の拠り所としたものは「意識の直接的与件」であり、いったんこの与件の特質が確認されると、ディルタイは実際は実証主義の理念からさして遠くに離れることはなかった⁽²³⁾。このアントーニの説明の正当性は、ディルタイ自身の言葉によっても立証することが出来るのである。「精神の中で生じるものを精神的生の理解された連関から基礎づけることを断念する經驗論は、必然的に実りの無いものである」(V, 147)。事実、「私が悲しく感じる時、この悲しみの感情は私の客体ではない。そうではなくて私がこの状態を意識することによってそれは私に対して存在しているのだ」(V, 197) やあるいはブルスラウ期の草稿群にも見られる「思考し、喜び、聞いたり見たりする、これらは私の意識においていかなる媒介も無く与えられ、直接的にそこに存在する」(XIX, 55)。「内的經驗は認識要素の単なる総合ではなく、人間の全体性を意味する」(XIX, 91) など、これらは皆、生ける連関を言葉の最も深い意味で「体験」として把握しようと努めたディルタイの、「經驗論ではなく經驗」(XIX, 17) の立場を表明するものである。

しかし、この「体験」が生根源的連関として理解されうるとしても、ディルタイがそれを「精神的、歴史的、社会的事実の把握の全ての根底にある」(V, 151) ものと言う時、またその意味で心理学から歴史的世界へ「橋をかける」(V, 237) 課題の達成を期待する時、そもそもそこで語られる歴史とは何であるのかという疑問が生じてこよう。つまり、ディルタイが描く歴史は、人間が「体験」を通して生けるものとして捉えられる範囲にとどまり、それ以外は視野に入って来ないのではないかという同語反覆的疑問である。実際、ディルタイは「現代の伝記

は、ある意味において歴史学の最も哲学的な形式である」(V, 225) という言い方をしている。また「時代全体の精神が一個人に代表され得る」ような偉人達の存在を指摘して(V, 236)、「完成した文化人(der entwickelte Kulturmenschen)」の心的生の連関を記述すること(解釈)を重要視しているのである。ミルが帰納や演繹によって確立しようと苦闘した学的認識の客観性の問題は、ディルタイにおいては「生」とひきかえにぬけてしまうのである。ディルタイがそれに代わって主張したのは理解関係における「親和性(Verwandtschaft)」に頼ることであった。「心理学は、人間相互の親和性に基づく力強い人間結合の組織の不変的存続に、確固たる不変の材料を持っている」(V, 226)。あるいは、他者の心的生を理解出来る研究者の存在そのものが「あらゆる人間の心的生の大きな内的親和性」を証明していることになる(「V, 199)」。そして、この「親和性」は後に解釈学的方法を展開する際にも、ディルタイの有力な拠り所となるのであり(V, 332)、「晩年の『精神科学における歴史的世界の構成』では、「共通性(Gemeinsankheit)」として、表現と表現されたものとの連関を成立させる概念として発展していくのである(VII, 208—210)。

本稿の主旨は、ミルの道徳科学の論理へのディルタイの批判を通じて、精神科学における両者の心理学を吟味することにあった。しかし、ここで主にとり上げた『考案』以後、ディルタイは、ヴィンデルバント、エビングハウス、さらにはリッケルトなどからの批判にさらされ、ミルの『論理学』によっていわば技癢を感じるようにして独自の精神科学を打ち立てようとしたその心理主義の軌道修正を余儀なくされるのである。この点に関しての考察は今後の課題としておきたい。

註

- (1) Rickert, H., Die Methode der Philosophie und das Unmittelbare, in *Logos*, Bd. XII, 1923, Heft 2, S. 236.
- (2) Breidbach, O., Spekulative Philosophie und Biologie, in *Philosophia Naturalis*, Bd. 22, Heft 3, 1985, S. 389.
- (3) Dilthey, W., Gesammelte Schriften, Bd. VIII, S. 191. (『 Dilthey 著全集』の引用は巻数及びページ数を示す)
- (4) V, 259. 及び Rickert, H., *Die Probleme der Geschichtsphilosophie*, Heidelberg, 1924, S. 13.
- (5) Misch, G., Die Idee der Lebensphilosophie in der Theorie der Geisteswissenschaften, in *Kant-Studien*, Bd. 41, 1926, S. 536—537.
- (6) Binnbacher, D., *John Stuart Mill*, Klassiker der Philophie, Bd. II, 1981, S. 151—152.
- (7) Schnädelbach, H., *Philosophie in Deutschland 1831—1933*, sw401, 1983, S. 303.
- (8) XVIII, XIX.
- (9) Johach, H., *Handelnder Mensch und objektiver Geist, Zur Theorie der Geistes- und Sozialwissenschaften bei Wilhelm Dilthey*, Meisenheim am Glan, 1974, S. 25.
- (10) 『ミル自伝』 朱牟田夏雄訳 岩波文庫 一九六二年。
- (11) Mill, J. S., *A System of Logic, ratiocnaitive and inductive*, seventh edition, 1868, vol. II, p. 413. (『ミル L. 論』)
- (12) ミルは「art」を「所謂今日の「芸術」とは違ふ少し古い意味で使用して居る。 L. 544.
- (13) ミルがここで比較して考えて居ることを図示すれば次のようにならう。

(最も一般的な法則)			(経験的法則)		
(中間公理)					
運動の法則	ニートン引力法則	ケプラーの法則			
心理学の法則	性格学の原理	日常経験の真理			

- (14) ミルは「社会学」 Sociology と同じ言葉を粗野な表現だとしておぼえている。 L. 486.
- (15) Gadamer, H. G., *Wahrheit und Methode*, J. C. B. Mohr, 1975, S. 205.
- (9) XVIII, XIX.

- (17) *Der junge Dilthey, Ein Lebensbild in Briefen und Tagebüchern 1852—1870*, Teubner, 1933, S. 36. (以下 JD. の略)
- (18) V, 148—149.
- (19) Schnädelbach, S. 126.
- (20) Johach, S. 11.
- (21) 若い時の日記に次のような一節がある。「真の歴史家とは、自己を、論証的に決定づけられるものの中にでなく、他者の本性から起こってくるものの中に見出す共働者なのである。なぜならば、真理は様々のあい異なる精神の仕事から生じてくるからである」(JD. 186)°
- (22) Cassirer, E., *Zur Logik der Kulturwissenschaften*, Darmstadt, 1980, S. 96.
- (23) Antoni, C., *From history to sociology, the transition in german historical thinking*, translated by H. V. White, London, 1959, p. 18.

(金沢女子短期大学講師)